

英語命令文の統語構造分析

田中, 公介
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6789545>

出版情報 : 九大英文学. 46, pp.191-212, 2003-12-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



英語命令文の統語構造分析

田中 公介

1. はじめに

本稿では英語命令文の統語分析を行う。その導入部として本セクションでは英語命令文の特徴に関して概観する。¹

まず、英語命令文では(1)のように動詞が原形で生起する。これは、(2)における法助動詞や(3)における仮定法節と同様の特徴であると言える。

(1) a. Be quiet!

b. *Are quiet!

(2) a. He will go to the school tomorrow.

b. That man should attend his party.

(3) a. I insist that she stay.

b. I demand that everybody be admitted.

c. I regret that he not be discriminated against.

(3)の仮定法に関して、(2)の助動詞に後続する動詞が原形で生起する事実と照らし合わせ、主語と動詞の間に音形のない助動詞要素があるという分析(Potsdam 1997a, Potsdam 1998)がある。これを踏まえて命令文の動詞が原形で生起する要因を、音形のない助動詞が生起する点に求める事が可能かもしれない。だが(4)の例に見られるように、命令文は仮定法とは異なり、否定文の場合には *do* が必ず使用される。

(4) a. Don't forget my birthday!

b. Don't be messing around when the bell rings!

c. Don't have eaten everything before the guests arrive!

(4a)のように、本動詞が単独で生起する場合に *do* が否定辞を支える要素として現れるのは助動詞を伴わない平叙文でも確認される事であるが、(4b-c)のように相助動詞の *have* や *be* が生起している場合においては、平叙文とは異

なりそれら助動詞が I⁰ の位置を占める事が出来ず、代わりに do が現れる。このような特徴は(3c)において、仮定法における否定化が not 単独で行われる事実とは全く異なる。よって命令文において音形のない助動詞を考える事は不可能であると考えられる。

更に仮定法とは異なる命令文の特徴として、生起する主語に制限がある事が指摘される。(5)に見られるように一般に音形をとる主語として容認されるものは二人称代名詞の you 或いは聞き手の解釈を有する名詞句である。

- (5) a. You take out the trash!
b. Everyone write to Congress about this atrocity!
c. Those in front step away from the barricade!
d. You and your men be on guard for anything suspicious!
e. The tallest of you sit at the back!

だが一人称・三人称代名詞や、固有名詞表現等は生起する事が不可能である。

- (6) a. *I/We go out here now!
b. *He/They eat the meal soon!
c. *John be quiet!²

一方仮定法は命令文とは異なり、主語の生起に関する制限は存在していない。

- (7) a. Jack asks that we not cut down his bean stalk just yet.
b. Who suggested that he not act so aloof if he hopes to find a wife?
c. We insist that Bob take the leftover vodka with him.

以上のような特徴から、英語命令文はどの文の形式にも類似しない、非常に特異な性格を有している事が見て取れる。

これら一見例外的な特徴を有する英語命令文の諸特性を既存の文法原理に帰する事は、現象の一般的な理解を深めるのみならず、英語命令文を例外的な構文であると考えた先行研究(Beukema and Coopmans 1989, Platzack and Rosengren 1997, Rupp 2003、など)を否定する点においても、非常に重要な命題であると考えられる。それ故本稿では英語命令文の構造を Chomsky (1995)、Radford (1997)、Roberts (1998)、Potsdam (1998)における素性照合理論を用いて説明する事により、以上の命令文の諸特性が命令文の事実に関する最小の仮定と文法独自の原理において導き出される事を提案する。

論文の構成として、2章では英語命令文の構造を素性照合分析の観点から考察した Potsdam (1998)の先行研究を分析し、問題点を考える。次に3章ではC⁰に[IMP]素性を導入した命令文の構造分析を代案として提案する。4章では本稿での構造分析を他の構文に応用する。5章はまとめである。

2. 先行研究

本章では、英語命令文の統語構造を、素性照合理論を用いて考察した先行研究として Potsdam (1998)の分析を概観し、問題点を考察する。

Potsdam (1998)は、英語命令文の構造を分析する上で、(8)のような二通りの分析を提案した。

(8) a. CP 分析 [CP [C' (do/don't) [IP Subj [I' (do/don't) [VP]]]]]

b. FP 分析 [F1P (Subj) [F1' (do/don't) [F2P (Subj) [F2' (do/don't) [VP]]]].

CP 分析は疑問文との平行性を考えたものであり、助動詞の do/don't は C⁰へと任意の移動を行う。一方 FP 分析は CP とは異なる二つの機能範疇が VP の上に投射する。³これらの案で Potsdam は、疑問文と命令文との構造の平行性が捉えられるという利点から CP 分析を採用している。

具体的に CP 分析を見ると、命令文の C⁰には、疑問文の C⁰にある[Q]素性と同様に、顕在的な照合を要求する強素性の[IMP]素性が任意に存在し、これが do/don't の移動を引き起こす。これが C⁰に存在する場合は do/don't-主語という語順を形成し、存在しない場合は主語-do/don't という語順を形成する。この[IMP]素性と照合を行う do/don't の範疇素性としては、Laka (1990)の提案した否定や強調の[Σ]素性を考えている。⁴

本稿では、命令文における do/don't が C⁰へと移動を行っているという Potsdam (1998)の分析は基本的に正しいと考えるが、彼の英語命令文の構造分析には以下の理論的な問題点が見受けられる。

まず主語 - do/don't という語順と do/don't - 主語という語順とにおいて、[IMP]素性がある場合と無い場合という問題が生じてしまう。つまり主語が do/don't に後続する語順では C⁰に[IMP]素性があるのに対し、主語が do/don't に先行する語順では C⁰に[IMP]素性がなくなってしまう。このような分析は命令文の解釈を行う[IMP]素性が C⁰に存在する場合と存在しない場合とがある事となり、意味部門で命令文の解釈が一様に行えないという問

題を呈する事となる。

また、Potsdam は C⁰ の[IMP]素性と照合関係に入る範疇素性として[Σ]素性を考えているが、この分析は諸言語の命令文の特性を説明できず、一般性が疑わしいものになる。(9)はドイツ語、(10)はベルファスト英語の例である。

(9) a. Werden sich diese Leute verteidigen?

will themselves these people defend

Will these people defend themselves?

b. Schreib es du heute!

write.2SG.IMP it you today

You write it today!

(10) a. Go you away!

b. Run somebody to the telephone!

(9a)の疑問文における助動詞と(9b)の命令文における動詞の移動先は、それらに後続する弱形代名詞の共通した位置から判断して C⁰ であると考えられる。となると、C⁰ の[IMP]素性を照合する範疇素性は[V]素性である。このようなドイツ語の特徴は(10)のベルファスト英語にも言える。Henry (1995)は、(10)の例における動詞の移動先として C⁰ を考えている。となると、この場合も C⁰ の[IMP]素性を照合する範疇素性は[V]素性という事になる。

C⁰ の[IMP]素性を照合する範疇素性が[V]素性であるという考えは(11)の初期近代英語の例からも支持される。この当時の英語の命令文では主動詞が直接移動を起こすものが確認されている。

(11) a. And feare ye nott them which kyll the body.

b. Forbid ye hym not.

c. doubte thou not all thinges rightly ordered be.

これらの命令文では、本動詞が C⁰ の[IMP]素性を照合するべく C⁰ へ移動を行っていると考えられる。以上のような諸言語及び初期近代英語の命令文において、動詞自体が C⁰ への移動を行うという事実は、上記の Potsdam (1998)の分析では捉える事が出来ない。

以上、本章では Potsdam (1998)が提案する英語命令文の構造分析を概観し、問題点を提示した。次章より展開される英語命令文の構造分析は、これらの問題点を補うものである。

3. 英語命令文の統語構造

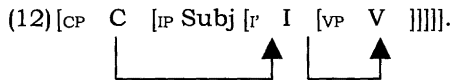
3.1. 代案

本章で提案される英語命令文の構造分析は、Potsdam (1998)の分析と同様に、疑問文の構造との平行性を捉えた分析である。概観すると、英語の命令文は CP まで投射し、英語の yes-no 疑問文において LF で解釈される [Q] 素性と同様に、C⁰において LF で解釈される [IMP]素性が存在するというものである。⁵本章ではその様式に関して具体的に考察していく。

疑問文の [Q]素性を認可する手段としては、I⁰に位置する助動詞要素が C⁰へと移動を行い文末のイントネーションを上昇させるものと、助動詞の C⁰への移動は起こらずに文末のイントネーションのみを上昇させるもの、の二通りの様式が確認される。それに対して、命令文に関してはイントネーション単独による認可はなされない。その代わりとして、命令文の C⁰[IMP]を認可する手段としては、特別な語彙項目の選択と、動詞 do の移動という二通りの様式が存在する、という事を以下より主張していく。

3.1.1. 語彙項目の選択による認可

まず、語彙項目の選択によって C⁰[IMP]が認可される様式に関して考察していく。これは do/don't の現れないタイプの命令文における認可手段である。図式化すると、命令文の C⁰が命令文特有の I⁰を選択し、更にこの I⁰が V⁰を選択している(12)のような構造を成していると考えられる。



(12)のような選択関係が成立する事によって、主語の生起が限定され、動詞は原形で生起し、命令文の解釈を行う [IMP]素性が C⁰に存在する、という英語命令文の各特徴を説明する事ができると考えられる。以降では、このような命令文の主要部間における選択関係を保障するメカニズムを示す。

3.1.1.1. 命令文の I⁰

まずは英語命令文の I⁰が特別な性格を有しているという考えを述べる。その考えは先に挙げた英語命令文の特徴である、音形を持つ主語の生起が限定されるという事実と動詞が必ず原形で生起するという事実、の二点から支持

される。まず前者の特徴に関して考察する。(13)は先に(5)として示した、音形を有する主語を有した命令文の例である。

(13) a. You take out the trash!

b. Everyone write to Congress about this atrocity!

c. Those in front step away from the barricade!

d. You and your men be on guard for anything suspicious!

e. The tallest of you sit at the back!

この形式の命令文において、最もよく現れる主語のタイプが(13a)の二人称代名詞 *you* である。この特徴は命令文主語の一般的な指示対象が談話の中における聞き手であるという点から導き出される。更にこのような考えは、音形を取らない命令文主語も二人称の素性を有している事を示す、(14)の束縛現象、(15)の付加疑問文のデータから支持される。

(14) a. Defend me / *you / him / us / them!

b. Defend *myself / yourself / *himself!

(15) a. Shut the window, could you!

b. Don't say anything, will you!

しかしながら(13b-e)のように、命令文の主語には形式的に三人称の主語も生起可能である。この事実は、命令文においては形式的には三人称主語であっても談話の中における聞き手ないしは聞き手の部分集合としての立場を担っており、二人称の素性を有している事によると考えられる。この事は、命令文において三人称主語が二人称の代名詞類を束縛する事が可能であるという、(16)の例から支持される。

(16) a. Somebody lend me *your/his* handkerchief!

b. Everyone pick up *your/his* bill on the way out!

c. One of the boys test *yourself/himself* while I wait!

d. Boys help *yourselves/themselves* to milk and cookies!

(16)の三人称主語に関して、これらは三人称の代名詞類を束縛する事ができるばかりか、二人称の代名詞類を束縛する事も可能である。つまり英語命令文における三人称主語は、形態統語的に三人称の素性を有しているのみならず、聞き手ないしは聞き手の部分集合として二人称の素性を有している事が示される。

また、このような命令文主語の一般特性により、以下のような命令文主語として生起できない名詞句の事実も説明できる。つまりこれらの名詞句は聞き手としての役割を有しているとは考えられず、二人称の素性を有している事が考えられない事による。(17)は(6)の再述である。

- (17) a. *I/We go out here now!
 b. *He/They eat the meal soon!
 c. *John be quiet!

以上の観察から、英語命令文の主語は一貫して聞き手ないしは聞き手の部分集合としての素性を有しており、それがない名詞句は生起する事が不可能である事が示された。この事は正しく命令文の I⁰ は二人称素性を有しており、その指定部に位置する主語との間に特別な一致関係が成立している事の例証であると考えられる。

次に命令文の I⁰ が特別なものであると考える二点目の要因として、生起する動詞が必ず原形でなくてはならないという(18)のような事実を見る。(18)は(1)の再述である。

- (18) a. Be quiet!
 b. *Are quiet!

このような事実は命令文の I⁰ とそれが補部として選択する VP の主要部 V⁰ 間において、特別な一致関係が生じていると考える事によって説明される。

以上、英語命令文の特別な I⁰ の立場に関してまとめる。英語命令文において、生起する主語が共通して談話の中における聞き手の役割を有し、かつその動詞が原形であるという特徴は、命令文特有の I⁰ がその指定部に位置する主語、そしてその補部として選択する VP の主要部 V⁰ の双方の間において、特別な一致関係を形成するメカニズムによるものであると考えられる。

3.1.1.2. 命令文の主語

上記において、命令文に生起する主語は聞き手と解釈される二人称素性を有している事を述べたが、その他の命令文主語の特性に関して考察してみたい。まず、それが担う格に関して、本稿では Potsdam (1998)、Moon (2001)、Rupp (2003)の先行研究と同様に、英語命令文の主語は主格を担うものと考えられる。このような主張を裏付ける事実が、初期近代英語の英語命令文におい

て、その主語に主格が付与されているという(19)の例である。⁶

- (19) Boy, a boke anon thou bring me!
boy a book immediately you.SG.NOM bring.2SG.IMP me
Boy, you bring me a book immediately!

更に諸言語の命令文主語も主格を付与される事実が観察される。⁷

(20) Russian

Ty kupi mne kakoj-nibud podarok.
you.SG.NOM buy.2SG me some present
You buy me some present!

(21) German

Schreib du den Aufsatz.
write-2SG you.2SG.NOM the paper
You write the paper!

(22) European Portuguese

Lava tu os pratos!
Wash.2SG you.SG.NOM the plates
You wash the dishes!

これら英語よりも屈折形態が豊かな言語では、動詞は命令文独自の屈折形態を担っており、その主語には主格が付与されている。これら初期近代英語及び各言語の命令文において、その主語に主格が付与されているという事実から、本稿では英語命令文の主語が主格を担っていると考える。

次に命令文主語の生起する位置に関して考察する。本稿では命令文の主語が他の平叙文や疑問文の主語同様に VP の指定部に基底生成し、そこから IP の指定部へと移動する VP 内主語仮説を応用する(Sportiche 1988)。この仮定は、(23)の遊離数量子、(24)、(25)の副詞⁸、(26)の VP 削除の事例から支持される事となる。

(23) Don't you all spend the whole time fighting!

(24) a. Everyone simply move to his right a little!

b. *Simply everyone move to his right a little!

(25) a. Don't you just stand there like a bump on a log!

b. *Don't just you stand there like a bump on a log!

(26) Billy didn't tell mom what I said, so don't you ϕ either!

(23)の遊離数量子は主語の右側に現れており、主語は基底の VP の指定部には存在していない。次に(24)、(25)の simply、just の副詞に関して、これらは VP と IP との間に付加する。それ故これらは主語の右側に位置している点で、主語が VP 内に無い事が分かる。最後に(26)の VP 削除では、主語が VP 削除の対象となっていない点で、これが VP 内にはない事が示される。

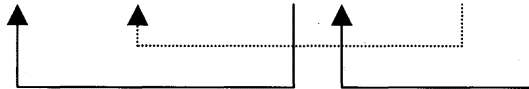
以上の分析をまとめると、命令文の主語は他の文タイプに生起する主語同様 VP 内に基底生成し、そこから IP の指定部へと移動し主格を付与されていると考えられる。

また、この事を I^0 の特性に関して述べるならば、命令文における I^0 は定形節の I^0 と同様にその指定部の名詞句に主格を付与する。従って命令文の I^0 の特異性は、聞き手に関連する解釈を有する人称素性を有する点と特別な補部の選択を行う点の二点に求められる事となる。

3.1.1.3. 素性移動による照合

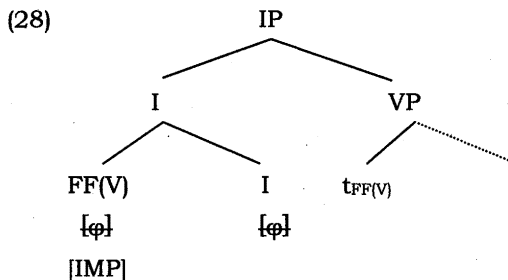
さて、本稿では(12)のような英語命令文の選択関係を保障する為のメカニズムとして、Chomsky (1995)の素性照合分析を考える事にする。これまでの命令文に関する諸特徴、つまり、①動詞要素が C^0 までの移動を行う、②主語の生起が聞き手に関連した要素に限定される、③動詞が原形である、④主語は VP 内から IP へと移動し、主格を付与されている、の四点を素性移動の帰結として捉えた結果、(27)のような移動が生じていると考えられる。

(27) [_{CP} C^0 [IMP] [_{IP} Subj_i[ϕ][Nom] [_{i'} I^0 [ϕ][ϕ][Nom] [_{VP} t_i [_{v'} V^0 [IMP][ϕ]]]]]]].



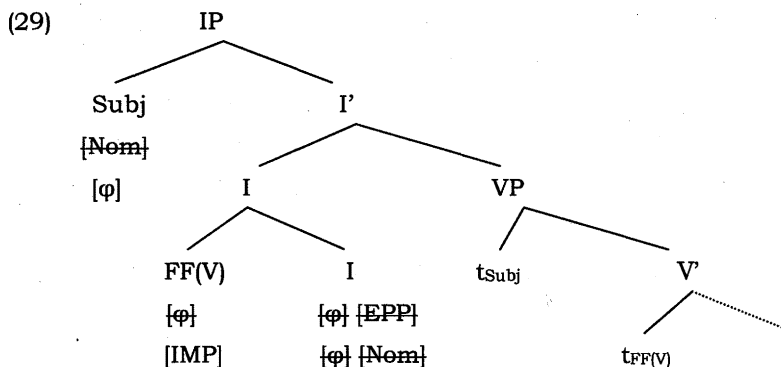
まず命令文の V^0 は解釈可能な[IMP]素性と命令文特有の[ϕ]素性を有していると考えられる。 V^0 の有する解釈可能な[IMP]素性は、上の①に基づく仮定である。また V^0 が有する特別な[ϕ]素性は、③の特徴を踏まえてのものである。英語命令文において動詞が原形で生起するという事実を素性照合理論によって説明するならば、命令文特有の I^0 が担う[ϕ]素性とこの動詞の[ϕ]素性とが一致を起こす、というものになる。これらの[ϕ]素性は解釈不可能素性であり、 V^0 が I^0 へと主要部移動をする結果、消去される事になる。この段階を図示し

たものが(28)である。



この[φ]素性の移動は、Chomsky の素性移動分析に従い、解釈可能な[IMP]素性を随伴するものとする。

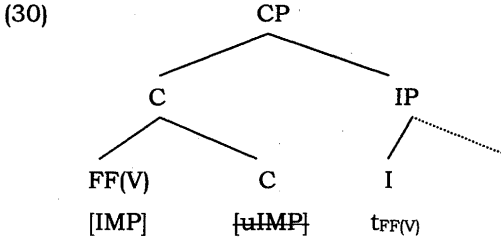
次に②と④の特徴を、素性照合理論を用いて説明すると、VP 内に基底生成した命令文主語は、それ自体が担う解釈可能な[φ]素性と解釈不可能な[Nom]素性と、I⁰ の担う特別な[φ]素性と[Nom]素性、並びに I⁰ の[EPP]素性を照合する為に IP の指定部へと移動する、という事になる。この段階を示したものが(29)である。



この場合、Radford (1997)の示唆に従い、I⁰は補部との一致を行う[φ]素性と、指定部との一致を行う[φ]素性を有している、と考える。前者は先に見た動詞の素性移動によって、後者は主語の IP への移動によって、それぞれ照合される事となる。更に命令文の主語は主格を付与されるので、主語と I⁰は共に解釈不可能な[Nom]素性を有する。このような分析の結果、上記②③④の英語命令文の特徴が説明される事となる。

そして最終的に、解釈可能な[IMP]素性を担った FF(V)は C⁰へと移動し C⁰

の担う解釈不可能な[IMP]素性を照合する。これを示したものが(30)である。



このような移動の結果、LF において解釈可能な[IMP]素性が存在し、命令文としての解釈を受ける事が可能となる。

以上、本セクションでは英語命令文の C^0 [IMP]を認可する手段の一つとして C^0 - I^0 - V^0 間の選択という様式に関して考察した。そのような選択関係は技術的に、Chomsky (1995)の素性照合理論によって保障される事となる。そしてその結果、英語命令文の諸特徴が導出される事となった。

3.1.2. do の移動による認可

do の移動によって C^0 の[IMP]素性を照合する命令文は、(31)の否定命令文、並びに(32)の強調命令文である。

(31) a. Don't you say a word!

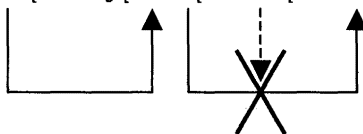
b. Don't anyone ask me any questions!

(32) a. Do EVERYone give it a try!⁹

b. For heaven's sake, of all people, DO YOU give me some support!

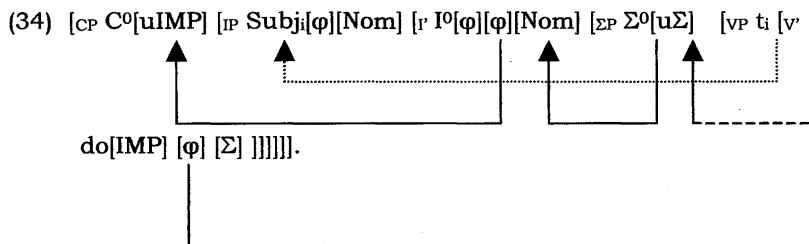
これらの命令文で問題となるのが、IP と VP との間に ΣP が現れる構造を成している点である。この主要部 Σ^0 には、否定命令文における否定辞の not/n't 及び強調の素性である[EMPH]素性を有しており、否定・強調要素が生起する場合は ΣP が IP と VP との間に介在する (33)のような構造を形成する。

(33) [_{CP} C [_{IP} Subj [_{I'} I [_{ΣP} Σ [_{VP} V]]]]].

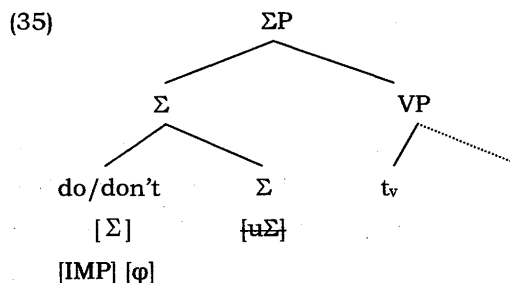


この場合、 C^0 と I^0 間における選択関係は成立するが、IP と VP との間に存在する ΣP の存在により、 I^0 と V^0 の選択関係が成立しない。従って、前節で

述べた主要部間の素性照合が阻止される事になってしまう。¹⁰ しかしながら、このような形式の命令文では V[IMP]を選択する動詞 do/don't が最後の手段として V⁰ に生じ、その移動によって素性照合が円滑に行われているものとする。この分析は(34)のように示される。



以下よりこの構造を考察していく。まず、V⁰に現れる do/don't は V[IMP]を選択する V[IMP]のダミーであるとする。従って、この do/don't は本動詞の担う [IMP]素性及び [φ]素性を併せて担うものとする。更に Roberts (1998)の分析に従い、この助動詞 do/don't は解釈可能な [Σ]素性を有しているとする。これが Σ⁰の解釈不可能な [Σ]素性より照合される事によって、do/don't の Σ⁰への移動が可能となる。¹¹ この段階を示したものが(35)である。



これ以降のプロセスは先の素性移動によるものと同様である。この次に do/don't は I⁰へと移動し、最終的に C⁰に到達する事によって、LF での命令文解釈を受ける事になる。

次にこの do/don't が解釈可能な [Σ]素性を有しているという仮定を考える。これは Zwicky and Pullum (1983)における、助動詞における接辞 n't を助動詞の屈折語尾であると考えた分析に依る。つまり、助動詞が否定辞を伴っている形態は、助動詞自身が [Neg] という範疇素性を有している証拠であると

考えるのである。この素性を有している結果、 ΣP よりも下位に位置する VP の主要部に生じた助動詞要素は、主要部移動制約の結果 Σ^0 において認可が成されると考えるのである。これを本稿で考える照合分析に応用すると、don't は否定辞を伴った形態を有している事実と、(32)の強調の do が現れた命令文において do には必ず強勢が置かれているという事実から、do/don't は解釈可能な[Σ]素性を有しており、これが Σ^0 への移動の結果解釈不可能な[Σ]素性を消去する事となる。

以上の分析から、do/don't が現れる命令文においては V^0 に生じたそれらの要素が連続循環的に C^0 へ移動する事によって C^0 [IMP]を消去する事が示された。結果、解釈可能な[IMP]素性を担う do/don't が C^0 にある事によって、命令文の解釈が達成される事となるのである。

3.2. 主語-do/don't の語順

英語命令文において主語が顕在化する場合、(31)、(32)の例のように do/don't-主語という語順が一般的であるが、Davies (1986)や Potsdam (1998)の先行研究によると、場合によっては下記の(36)、(37)のような主語-do/don't という語順も容認されるそうである。

(36) 主語-don't の語順のもの

- a. Girls go into the hall, BOYS don't move!
- b. YOU don't sit down!
- c. *You don't sit down!

(37) 主語-do の語順のもの

- a. ?At least your OLDER children do come camping with us!
- b. YOU do sit down!
- c. *You do sit down!

さて本稿でこのような形式の命令文を扱うにあたって、do/don't が義務的に C^0 への移動を起こす事を仮定しているので、それ以前に現れる主語は元位置の IP の指定部にはない事が考えられる。本稿ではこれらの主語の多くが強勢を担っているという事実に着目し、do/don't に先行する主語は CP の指定部へと焦点解釈を得る為の移動を行っていると考え。具体的には、主語が顕在化する場合 C^0 が[Focus]素性を有しており、これに[EPP]素性が導入

される場合において主語は CP の指定部へと移動を行い、主語の持つ解釈可能な[φ]素性によって[Focus]素性が照合され、結果主語は強勢を得ると考えるのである。

顕在的主語が義務的に強勢を有するという上記の仮定は、Akmajian (1984)の分析からも支持される。彼は(38)のようなデータを考察する事により、(39)のような顕在的命令文主語に関する一般化を行っている。

(38) a. Don't YOU leave the room!

b. *DON'T you leave the room!

(39) 命令文の主語に顕在的主語が生起する場合、その主語が動詞句に先行す

部分において唯一のイントネーションの中心をなさなくてはならない。命令文においては、主語が音形を有さない形式の命令文の使用が一般的である。それ故、命令文において、音形を有さない主語が無標のものであり、音形を有している主語は有標である。また、これらを情報の重要性という観点から見た場合、顕在化されている命令文主語はそうではない命令文の主語と比較して情報の重要性が高い。それ故に有標である主語付き命令文は、その主語として形態的に示される聞き手に対し、何らかの強調の意味合いを必然的に負う事となる。事実、Davies (1986)は、顕在化された主語は、話し手の聞き手に対する権威や、戒告的な意味を付与すると考えている。

さて、一方においてこのような主語-do/don't という語順の命令文を非文として扱う先行研究も存在している(今井・中島 1978、澤田 1983、Tanaka 1988、Flagg 2001)。事実、このような語順の命令文は(40)の各例文を見ても分かるように、主語が表す対象が他の要素と対比を表すような文脈において使用される事が専らであり、その事から主語-do/don't の語順の命令文の使用が do/don't-主語の語順のものよりも制限される事が推察できる。

(40) a. You and Mike do take more lasagna, there's plenty!

b. Girls go into the hall, BOYS don't move!

c. I'll be sure to watch everything while your family is gone.

You all don't worry about the dog, it'll be fine!

d. She is emotionally vulnerable right now.

So you don't be nasty to her, all right?

この要因を本稿での素性照合分析を用いて考察すると、主語-do/don't の

語順の場合、主語は C^0 の[EPP]素性によって CP の指定部へと移動し、その結果[Focus]素性を照合し、強勢を得る事となる。一方、do/don't - 主語の語順の場合、 C^0 に導入された[Focus]素性を照合する為に、主語の持つ[φ]素性が C^0 まで素性移動を行い、[Focus]素性を照合すると考える。このように、主語-do/don't の語順のものは句全体が移動の対象となるのに対し、do/don't-主語の語順のものは C^0 に[EPP]素性が存在しないので句全体が移動の対象とはならず、主語の形式素性のみが移動の対象となる。この事を移動の経済性という観点から見てみると、後者の派生よりも前者の派生の方が、より多くのコストがかかるという点において望ましいものではないと言える。

以上のような、主語-do/don't の語順における、主語の CP 指定部への[Focus]移動分析は、移動の経済性という観点からその使用が do/don't-主語の命令文よりも制限されてしまう事を説明する事ができる。

以上、これまで本章で考察してきた命令文の構造に関する分析をまとめると、命令文の C^0 には[IMP]素性が存在しておりこれを照合する為に $C^0 - I^0 - V^0$ 間の選択関係と do/don't の C^0 への移動という二通りの様式が存在する。

更に、主語が do/don't に先行する形式の命令文では、IP の指定部にある主語が CP の指定部へと焦点解釈を得る移動を行うと考える。これによって顕在的な命令文の主語が必然的に強勢を得る事実が説明される事となる。

4. 本代案によって説明できる他の構文

本章は、これまで本稿で行ってきた命令文の構造分析を、命令文と意味的に類似した他の構文にも応用する。具体的には Let's 構文、疑問形提案表現の二つである。

4.1. Let's 構文

Let's 構文とは、文頭に let's を伴った(41)のような構文である。

(41) a. Let's go to the park!

b. Let's see what's at the movies!

まずこれら let's 構文は(42)の let 構文とは異なるものである。

(42) a. Let us go to the park!

b. Let us see what's at the movies!

それ故 let's の立場は、let と us の縮約形ではない。この事を以下より示していく。

まず、let's 構文において、let's に後続する名詞句が let 構文では現れない場合がある。(43a)が let's 構文、(43b)が let 構文である。

(43) a. Let's you and me be roommates next year!

b. *Let us you and me be roommates next year!

次に、節の先頭に現れる主語名詞句に関して、let's 構文ではその生起が許されないが、let 構文では許される。これが(44)と(45)の対比を生む。

(44) a. *You let's publish this report!

b. *Nobody let's eat that leftover cake!

(45) a. You let us publish this report, or else!

b. Nobody let us eat that leftover cake!

更に両者の違いとして、その文末に現れる付加疑問文が挙げられる。let 構文では will/won't you が現れるのに対し let's 構文では shall/shan't you が現れる。

(46) a. Let's help him, shan't we?

b. Let's you and John and me do it together, shall we?

(47) a. Let us help you, won't you?

b. Don't let John keep the original, will you?

以上のような対比から let 構文は主動詞 let による命令文であり、その後ろに現れる名詞句は目的語である。これに対して let's は単一の語彙を形成し、let's に後続する名詞句は主語である。

それ故 let's 構文の構造は(48)のようなものであると考えられる。

(48) a. Let's you and me open the door!

b. [_{CP} let's [_{IP} you and me [_I I [_{VP} open the door]]]]!

しかしながら本稿では、let's 構文の主語が一様に対格を付与されている事実をふまえ、それを直接 C⁰ に基底生成するものとする。C⁰にある要素がその主語に対格を付与する様式は、以下の平叙文における補文標識 for とその主語の関係と同様である。

(49) It is important for him/*he to attend the meeting.

更に let's 構文が「提案」の発話の力を有している構文であるという事実を踏

まえると、この構文の C⁰ にも[IMP]素性があると考え事が可能となる。これらの考察を照らし合わせ、let's は[IMP]素性が語彙的に顕在化したものであり、C⁰ に基底生成し、その主語に対格を付与すると考える。また、C⁰ にある let's は IP の指定部位置に一人称主語をとり、原形の動詞を補部を取る I⁰ を選択している。

つまり、let's 構文における let's を C⁰[IMP]の形態的に具現化した要素である命令文と捉える事により、本稿での命令文分析を let's 構文へ拡張できる事となるのである。

4.2. 疑問形提案表現

疑問形提案表現とは、形式的には why don't you ~ という句から始まる WH 疑問文であるが、聞き手に対して疑問を行う意味と提案を行う意味の双方の意味を有しているものを示す。具体的には以下のようなものである。

(50) Why don't you call on tomorrow?

この疑問形提案表現は、意味的にも「提案」の意を示す命令文と同じ特徴を有しているが、それは以下から示される統語的類似からも察する事ができる。

まず疑問形提案表現に生起する主語の制限が存在する。(51)において疑問形提案表現ではその主語に二人称ないしは一人称複数の解釈を有する名詞句のみが生起出来る事が確認される。

(51) a. Why don't you devote yourself (yourselves /ourselves /*myself /*himself /*themselves) to charitable work?

b. Why don't you (we) devote yourself (ourselves) to that work?

次に、疑問形提案表現は命令文同様に過去時制が持てない。

(52) *Why not clean up the room yesterday?

更に疑問形提案表現では don't 以外の助動詞が現れない。(53b)のように didn't が現れて容認されるものは「提案」ではなく、「疑問」の解釈しか持てない。

(53) a. *Why won't go to the movies?

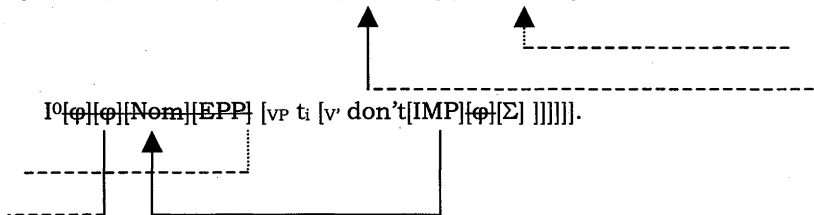
b. Why didn't you clean up the room yesterday?

以上のような命令文と類似した統語的特徴から、疑問形提案表現においても C⁰ に[IMP]素性を仮定できる。つまり疑問形提案表現における助動詞の駆

動要因は解釈不可能な C^0 [IMP]素性の照合である。疑問形提案表現において生起し得る助動詞要素は、(51)のように don't のみであることから、命令文における do/don't と同様に、don't が解釈可能な[IMP]素性を有しており、解釈不可能な C^0 [IMP]を照合すると考えられる。このように助動詞要素が解釈可能な[IMP]素性を有し、解釈不可能な C^0 [IMP]を照合するというメカニズムは、先に示した do/don't の現れる命令文と同様のものである。

しかしながら do/don't の現れる命令文とは異なる特徴として、疑問形提案表現では WH 句の why が CP の指定部に移動している事が見て取れる。この特徴を説明するべく、疑問形提案表現の C^0 は、解釈不可能な[IMP]素性に加えて、解釈不可能な[IMPQ]素性を有していると考える。この素性を照合するのは解釈可能な[IMPWH]素性を担う why である。それ故に疑問形提案表現は(54)のような構造を有していると考えられる。

(54) $[CP \text{ why}(\text{IMPWH}) [C' C^0[\mu\text{IMP}][\mu\text{IMPQ}] [IP \text{ Subj}[\phi][\text{Nom}] [I'$



以上、本章では let's 構文と疑問形提案表現の構文において、本稿の命令文分析を導入する事により、統一的な分析を試みた。

5. まとめ

本稿では英語の命令文に関する統語分析を行った。要約すると、命令文の C^0 には[IMP]素性を照合する為に、do/don't が現れていない命令文では V^0 の解釈可能な[IMP]素性が素性移動を行う一方で、do/don't が現れている命令文ではそれらが顕在的に C^0 へ移動する事により C^0 [IMP]を照合する。それ故に命令文の C^0 [IMP]の照合手段が、各機能範疇間の選択関係及び do/don't の C^0 までの主要部移動、の二通りにまとめられる。更に主語-do/don't という語順のものは、主語が CP の指定部に焦点移動を行う事によって成立する。

このような観点からの命令文の構造分析によると、他の文タイプとの違いが明白に現れる事となる。まず命令文と疑問文は、両者共に C^0 に移動でき

る助動詞を有している点で共通するが、前者は *do/don't* のみで、後者は *I* に位置する助動詞全てが移動できる。この相違は *C*⁰ に解釈不可能な [IMP] 素性があるかないかに求められる。命令文においてはこの素性が存在する為に、これを照合できる助動詞要素は *do/don't* に限定されるが、疑問文においては *C*⁰ に [Q] 素性があるのみであり、移動する助動詞の制限は生じない。¹² 次に命令文と仮定法は、両者共に動詞が原形で生起する点で共通するが、仮定法は命令文とは異なり主語の生起に関する制限が存在しない。それ故に仮定法の *I*⁰ の [φ] 素性は、命令文とは異なり一般的なものであると考えられる。

このような分析は Potsdam (1998) の先行研究で問題とされた点を克服するばかりか、一見例外的な英語命令文の諸特徴をも説明可能とする。更には各言語の命令文ないしは初期近代英語の命令文の構造をも説明するのみならず、*let's* 構文、疑問形提案表現といった、意味的に命令文と類似する構文の構造をも説明できる事になる。

註

1. 本稿では、主語が顕在化する一方で否定辞の *not* が縮約しない、以下のような否定命令文は扱わない。

- (i) a. *Do not you keep us all waiting!
- b. ??You do not be such a nuisance!
- c. *You do not sit down!
- d. *Do you not open that door!
- e. * Do you not try again!

また本稿では議論を円滑に進める為に Pollock(1989)以降の *split-Infl* 分析を用いない。

2. 三人称の固有名詞表現は、等位構造にすると適格となりうる。

- (i) John go back and Mary stay here!

これは等位構造を成す事によって等位項間の主語の間で対比が生じ、その結果聞き手としての解釈を得る為に適格となると考えられる。

3. Potsdam (1998) では、*F*₁P を TP、*F*₂P を AgrP と考えている。
4. ΣP の詳細な説明に関しては Laka (1990) を参照。
5. [IMP] 素性の性格の一つとして、*do/don't* を *C*⁰ まで義務的に牽引するという統語的

な性格を担うと仮定する一方で、その意味内容を特定化する必要がある。その為に命令文を発話行為という観点から眺めると、命令文が有する発話の力は「命令」・「要求」・「依頼」・「懇願」・「願望」・「提案」・「許可」の7タイプに分類される(今井・中島 1978)。これは疑問文において C⁰にあると仮定される[Q]素性が「疑問」という発話内の力を有している事と同様である。それ故、命令文の C⁰にある[IMP]素性は LF においてこれらの発話内の力が結びつく事によって、命令文としての解釈をもたらす事となる。

6. (19)は Rupp (2003)より引用。
7. (20)は Moon (2001)より引用。
8. Potsdam (1998)は Jackendoff (1972)の言葉を借りて、これらの副詞を E(xtent)-Adverb と呼んでいる。
9. 大文字で表記されている語は強勢が置かれているものを示す。
10. このような事実は Travis (1984)における主要部移動制約の反映である。
11. Roberts (1998)の、do/don't のような助動詞は形式素性の集合であるという分析をふまえ、本稿での do の移動は顕在的な素性移動と考える。
12. 形式的には yes-no 疑問文だが、その性質が聞き手に対してある「行為」を依頼する(i)のような疑問形依頼表現においても、命令文との類似性を示す点から C⁰に[IMP]素性を仮定できそうである。

(i) Could (would/can/will/won't/can't) you pass the salt?

まず命令文、疑問形依頼表現ともに過去を示す副詞が生起しない。

(ii) a. *Send me a letter yesterday!

b. *Would you send me a letter yesterday?

次に、生起する主語が談話中における聞き手か、その聞き手の部分集合に属している三人称主語に限定される。

(iii) a. You/Someone/*I open the window!

b. Can you/someone/*I open the window?

疑問形依頼表現の C⁰[IMP]の照合様式に関しては、C⁰が I⁰に基底生成した can や will といった法助動詞を選択し、C⁰の[Q]素性によってそれら法助動詞が移動を行うものとする。この場合、(iv)に見られるように、疑問形の依頼表現として生起できる法助動詞は生起が制限される為に、この場合の I⁰は特別なプロパティを有していると考えられる。

(iv) Can/will/*may/*should/*must you pass the salt?

これらの事をふまえて疑問形依頼表現の構造を示すと、以下のようなものになると考えられる。

(v) [CP C⁰[uIMP] [IP Subj_i[ϕ][Nom] [I' can/will[ϕ][ϕ][Nom][EPP] [VP t_i [v' [ϕ]]]]].

参考文献

- Akmajian, A. (1984). "Sentence Types and the Form-function Fit." *Natural Language and Linguistic Theory* 2, 1-23.
- Beukema, F & Coopmans, P. (1989). "A Government-binding Perspective on the Imperative in English." *Journal of Linguistics* 25, 417-436.
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Flagg, J.E. (2001). "You" can't say that: Restrictions on Overt Subjects in the English Imperative." *CLS* 37, 161-173.
- Han, C.-H. (2001). "Force, Negation and Imperatives," *The linguistic Review* 18, 289-325.
- Henry, A. (1995). *Belfast English and Standard English: dialect variation and parameter setting*. Oxford: Oxford University Press.
- Iatridou, S. (1990). "About Agr(P)." *Linguistic Inquiry* 21. 551-557.
- 今井邦彦、中島平三 (1978). 『現代の英文法(5)』. 研究社出版.
- Laka, I. (1990). *Negation in Syntax: on the Nature of Functional Categories and Projections*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Moon, G. (2001). *Grammatical and Discourse Properties of the Imperative Subject in English*. Ph.D. dissertation, Harvard University.
- Platzack, C. and I. Rosengren. (1997). "On the Subject of Imperatives; a Minimalist Account of the Imperative Clause." MS, Lund University. [Published in 1998 in *The Journal of Comparative Germanic Linguistics*, Vol.1. 177-224].
- Pollock, J.-Y. (1989). "Verb Movement, Universal Grammar and the Structure

- of IP." *Linguistic Inquiry* 20, 365-424.
- Potsdam, E. (1997a). "NegP and Subjunctive complements in English." *Linguistic Inquiry* 28, 533-541.
- Potsdam, E. (1998). *Syntactic Issues in the English Imperative*. New York: Garland Publishing Co.
- Radford, A. (1997). *Syntactic Theory and the Structure of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rizzi, L. (1990). *Relativized Minimality*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Rizzi, L. (1997). "The Fine Structure of the Left Periphery". In *Elements of Grammar: Handbook in generative syntax*, ed Lilliane Haegeman, 281-337. Dordrecht: Kluwer.
- Roberts, I. (1998). "Have/Be Raising, Move F, and Procrastinate". *Linguistic Inquiry* 29. 113-125.
- Rupp, L. (2003). *The Syntax of Imperatives in English and Germanic*. Palgrave. Macmillan.
- 澤田治美 (1983). 「英語命令文の構造的特性: 特に範疇 AUX と COMP の不在を中心として」, 『言語研究』. 83. 15-40.
- Sportiche, D. (1988). "A Theory of Floating Quantifiers and Its Corollaries for Constituent Structure". *Linguistic Inquiry* 19, 425-449.
- Tanaka, S. (1988). "Some Notes on English Clause". *Linguistic Analysis* 18, 156-181.
- Travis, L. (1984). *Parameters and Effects of Word Order Variation*, Ph.D. dissertation, MIT.
- Ukaji, M. (1978). *Imperative Sentences in Early Modern English*. Kaitakusya, Tokyo.
- Zagona, K. (1988a). *Verb Phrase Syntax: A Parametric Study of English and Spanish*. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Zwicky, A. and K. Pullum. (1983). "Cliticization vs. Inflection: English n't." *Language* 59. 502-513.